百万　白鬚
柏崎　岩船
角田川　自然居士
籠太鼓　東岸居士
嵐山　谷行

912.3
ヒ
一

男者トモ

百萬　脇僧壱人　角帽子水衣腰帯珠数扇指
児　放髪小袖長袴扇

竹馬にいざや法の道〳〵まことの友を
尋ねん　是は那方に住居する僧
にて候さてもこれにわたり候人ハゆゑある
幼人にて候をひろひ申て候この比ハ嵯
峨の大念仏にて候程に同道申大念仏
にまいらばやと存候

面曲見大口帽子小袖
長絹腰帯扇持篠

あくわうの大念仏はかしやさきそうには
大念仏をとさめうり前なけれはやかうろ
南無阿弥陀仏や南無阿弥陀仏や南無阿
弥陀仏や なむあみた 弥陀仏ものむ
君さたのむ人は西東の月なまめや雲晴
ねかひも頼へ〱 あみたやなまふたと
誠は西のまうさん雅か縁まさるへき

覚や甚の抱疾ひ 乱世んの悉種は
力車か七車 せむとせつき〱
とをひ斎やたかゝ元はさま 厳か
西の誓 弥陀乃力に程あや誓めは歯色
阿弥陀仏 宝藏世をのちの観音は如
ねまつやまて〱 精武闘我情鳳の如
勝月は満鳥雲やまうりかはもあ満世か

猶三寳の在世かや牛車ハ東れとおとれ

ふいゆくさきてひろうんゑいさうえいさ

〳〵やひきや車 我見ろ里我見ろ家ハ

宮百萬の姿寺 とさよう申よ[illegible]變

ちよ 我ろ出るとくみなすて あち

無ゐ烏帽子引き入れて 又肩ぬ里ぬ衣

亂進里ぞ變ん うつくしむも鳥 うか

進と人立たとき出かた姿 思ふぬ人とも鳥

好き進も 親子の緒也おきれ家 肩とも

まん寳すそ出さし 出ろとも請ねく

肩ふ乗く當 遂ことまで 菅薦乃

亂進ん亂かろ肩に 釋迦除法佛も信ん

ちよ彼さとも わろ子ふハ阿弥陀ん亂かり 哀

衆や大聖釋迦牟尼佛 見ろ子ふ申そ

世の中を思ひ給へ いふにも色々文字の
わき 何事にて候ぞ 子 花盛る梢を見て
候も真実にて候へ 候にそれかなかりけれ
の様なくとも給へ わき 花は盛
よらぬ事とも御前にて世にかくるゝ人も
候へし よふく気せうす御前 人 して 承ふ
く清楽のまゝ海りてすゝめかやひく

まへ候ふ わき 仰に花盛る梢を見ての面白
いはれくの人そ して 花は紫色の錦の着せ
候 わき さて何ゆへかやうに狂乱には候ふそ
七下 子にいはれてまかれてさ候ふかなふ
かいまてて候 わき さてもとも子をいふ君のかり
さ嫁しかへ事 して なふ其事は御ゆるし
色さふうれしのうれし事へはら郎事

賢の垂迹人ふ西代さうさうしもり忌
わるふ迦毘羅城ふと車ふ法の祥瑞
てわすふにありんと称ふ宮さうさうハ
いさり成仏信ん称なくさうかる維那
集の其中ふおなもう八思りあそもらん
慈しき人の教化行うるさて称さうかもしも此衆
説うくしもあるくもしも此佛も羅ニ六ちう志

と称讃へむ　称名ふあふむ芸神なまや
観音河ふむの神利まや百萬ゥ鉢
男称讃へしても上わるや菩のまひの神　同上　わるる
の向後いかる利り　宮居惟そうは
みそもすあハ窟　すまぬ時ふは真言も
利も世のそもいるの羅そや　年
往隆り皈里鳴鐘枝の源文よ集利

憂世の中ハ浮き波のよるべもなく雲水の
の身乃ほどをいふなる此の松の掛まとふ
乃声ハうき年月を送りしに
さらに無縁の中乃野辺の末いかに
かゝる浮世の中に憂き身乃さだめ
と成果て時雨の袖しを涙の
なき跡乃 常に浪屋見る柄乃

西の

二折りてどふも角にも修人の捨てゑの
源ぞそ神の志からぬ俤なきに心ひとさ
なる年波の流れて川の影にき昔北
寺の柳がよりその白浪白露の掛かる
別まそ川ちとも其ときに手ならひ言
影ぬる葉末の露をも浮き世はよしある
らの都もと去り行く御り三笠山ささの

川もとうらはれて山城に井手の里知る
花のうらく影うつる面ハけにさましき
蜜なりまらかくて月日も送る渡りの
峯のあは雪ハ深の弱足に任せく行縣
都のふしときこて法る諸織地のちすり
糸りく思前九ろしききも地建八宗範乃
深草の亀山や　同上　雲になりる大井

はまとに世の仏のなまか國豊り
山城嵐の古松の尾上金の里乃又
霞立う渉く嵩も宮と礼融切みて芳野
きか哀世緒解集すの漕るの清き喜き
進よりも竟よりも唯す寄そ高難き
かつしもみかくもう深くも男子中ハ照塞
甚せも二条に乃中習我くよまきの垂ひ

あ遊たあきらめんあるとて毘首羯磨
か作りし赤栴檀の等身像そ仏力
を現して天竺震旦我朝三国にわたらせ
有難くもしばらく現し給へ安居
の法と申も　仏母摩耶夫人の孝養
の御為なるを仏を法母と申し給ふ
されば説人君の身として母を

所しまねど慳貪放逸の身をもがらん
たんして頼ましく観音親子あり世尊の
御たまふや百万の群類をかへある
わらふ。　悉し慶羅睺羅夫人の平
おかしこやうらうの身なれんあるわら子
悉しや我子たちなふ　南無救世童
尼佛と雅人なからうそ子ふりやあ者。

信んじきたよ南無阿弥陀仏なむ結
也牟尼仏南無阿弥陀仏とぞ仏となりにしも
逆縁のうち摂ひみあはせてへひ給へ
帰りぬる道もいつやら覚おそねて
この名号よ語るうらみん浄土の世よ
んはよやそくふもとの道ひ参るも
あるかぬ恥も心の物狂ひあらう

めとへは光とも道あふれうとんけ
の花をもちえて霞くまわり
しらぬ勝光も光へむ浄土の菩薩る
かけよりも衆生の為乃安なき道へ弥
まわらぬもにめでたる法の力ぬ抄あ里
別て道影ひとつ川乃東海の都へせ
下ぞ帰りまる都へ立ち帰りのまる

楠露　脇男一人　放髻　笠　相スハウ大口
腰帯　扇

夢路もそなたと思ふ古郷よりも御身やうて
なかりけん

詞
是ハ越後守楠露殿の御内
に小太郎と申者なりさても我か
は楠露殿ハ去ぬる程に
御敵の風のたちたる所に
さしく梢

此座のうちハ安元の御狩とよ所ハ此座敷
此道世まて此座の様にハなる所ハ所見也
拾唯今越後の者ともさ見へ申候
羽の袖も見ゆる袖やすんく今
所の雪の去ても降り嵐村時雨山
のうちそ色見りき袖さへ海さ裏衣
雅楽の流ともら越後の申す是ハ

思ふく急の様に花ハ候や春梅の
是て此河のあさましき人一人此座ほと
もはや此あかりて薄屋と参りて此ときハ小屋の
家業同じとや此すゝめて此ものに雅楽
此様をうつり中此小太郎か参りて候中それ
此中此人　面曲見て　座敷府　小太郎とやらん人まても
御一所ハ人まつ也　や花ハ此参りて

さても花月ハ小歌を謡ひては　シテ　いかにも小歌
あらおもしろや心得て候ハ川偏りあらそ
ワキ　かくと申さん為に花月ハ来りて父子なれ
ゆかしきさんざんに見えてとも候ふ御経
シテ　あら嬉しきや何とて持ちかへてさらく
ワキ　ことなくそれ花月ハいかに　ワキ　花月殿
ハ此遁世めく此僧は　シテ　遁世とも父子

志ゝの里を出でて遁世の身となりて候さて花月
ワキ　彼の僧の花月を持ちて来りては　シテ　かくそ
ハ花月が父の在しく我が行ひる人おと
さそふこのうちにとなつかしく修行もうち
しかるに花月を也に命ずる修行ハ申く
きわもくちもうめしやそや唯今御物に立
生まれては此の其の筑紫彦山に

あやかりて形見をみるこそ悲しかる　さ
りや空蟬の形見ハいかなる事そ宮ひ
し雲路にわけしも世をめくいひて熱
ます　唯古里の御事をこそ覚束なく思
此空蟬まても人ハきえて書すハ御文
まつしなり　空やさこうハおもひすゝめ
三年まて過て無後ハ我を此道川

の世かハ思ふへき　此理りと思へとも猶
きをとらせめ給ひし　形見を此程へ
空屋数て見早髪なき世をと云へて形
見をみるから猶増ちむ涙をせきあへぬか
形見き形見と云へとも一しほ思ひくれすゝめ
母　さてもく　父御前病の床の
給ひなくなり給ふへのうちのか

あしらハ唯念仏を世渡りへまゝを論りて
御深切人知らも世渡りハ念ともいひまし御深
物の底をもやさあるまやきんとふかふんにて
きへらもふくんつよくも出るなり家かまうあく
今に三年のうちに来るへし檀那の形見
其御深切して御ん心を聞れわしますせとふ
いかなる文のうるめうきよ　翁あらん文ふる

諸まへ多羅の如くにみある文あ文の前書ふん
文翁通ハく出て八徳の身に教ふる男のなりや
悟き入ある母小深あもかえんもかふんの前
御んうるめしの講尊屋を文時ハ飛ふゐるるを
売まて人ぶ子乃窮女理小御り世渡へ
邪佛ぞ形姿へも氣あるるく

信角字一あ政略字
爆紋扇　子同字

信
先ハ信濃雲書先寺の業蜜の稲あくハ

又こまかにいはゞゆくゑもしらぬ人まゐ
入りては善悪を起こし作せは羅刹の
形を見せて含利相一の人なる
渡りは此羅刹の業へ因果さ世ゝに至る業に
てはなき習同居中来りやとさる者 西曲尺 水衣
腰ニキ サン 棗 一巻 しテさをひ
妻へ立八何をもたゝ悔そ我にも抱け
なほ羅にかしいやも雲も気あらはさる

物ぐるひ對せ女へまゐれをもいかにかゝる
妻も八歌ての別まともり今猶わすれ難
見えたるをとまる文 一巻上
それ如くは者もなき三乗の
都をも山を入るへん 計上 實やへる月にさき
明月かりて誰かひなん雇宝庭文字は
ふ志われさしかりをゆへなん色理りの菜
月のよ風をかすむりを花色を錦に書きその

ここ
タアクや

ゆへと出へいうゝめしや夢見ハ借とおもふのえ
や指済ちまとゐるひつく　觸保の東府ふ
是しゝハくべあもまるね我済いうまて葉
乃川まてと志ゝねんまあさ夜ゝゝすゝ高
く也も須ふ松渚妻くさのしまゐ
豊盤の里れ名屋我ふ角へゝく最なる
ハ山里子撥へふ身をまあゝ志しへ我へのきゝ上

陸の里とや速とも油しゝぬ濡香のあ
さ郡もいふ六元るよ桐乃船さゝ舛の上の
出と東ふ乃取しつ釈ふ口へハ告光ち生
身の湯海也来まる粗飛ハそてとまぬ飛
て別し素を上将しとれりしませ　傍　いふ光
な酒猪女宴ハ関濡の志ゝもめ人乃身と
しても竹嫁ましゝふく也め　へ　しも　め人の身

と衆生に習ふや極楽世界へ是方便唯
称念佛得生極楽とこそ承れ 偈へ 花も
なりきの極楽ハこそ色々の宝を以て
飾へ楽なそ 貴ハ弥陀の浄土なれは
の極楽ハめくりきたるや唯人の浮世を
安時ハいよいよ花るの菩薩の内陣とハ極
楽の九品上生乃蓮台にならせ給ふ人ハ是非

しきとの御割教とハそ色さまさまの仏
きかるよし人ハ弥陀も色相せあまたあり
去る人南無阿弥陀仏 其のりやく
しそ 慈悲の誓あり 浄土ハ弥陀の実らこまかし
あらたさりと花ハ弥陀極楽の上品上
生の内陣ハみなやありし光明遍照十方
の極楽ハこそたちたきなるの遍の世界の

むかし今に伝ふやまさんく　花ある摂取を
能く見れは風ハ楢葉の母かくゆへに人めの
隙をまつかひく尾花やと思ひは
なふく　業へ来る世持のはした烏帽子直垂
色素袍の形見あかくやへとも形見とこそハ
化粧花なく花と織しともひきつまりた
花もとめ来て来るをそて素袍後宮紅なと

形らひやと思ひは烏帽子付　あるはやまた烏帽
子直垂の袖はハ見る素袍ゆかしき紋字に付くとも
男は、なかしすくハ三揃を肩衣と袴そろへ
新春音の袴もたちまいらぬ文作らとき
家日のあそひまハ、なんて座敷に新舞春
てかんせんとて鎧直垂花ちかく衣文うつて
しうまなひて風ん如らとして打つ家

手拍子人にまさりやさゝくて扇打つならは演
諸の仏 丈一念称名すれは乃 内外は摂取
の光明なまらす聖衆来迎の雲の上にて
九品蓮臺の花散て 異香みちくて
人に薫し 白蓮池に満々て まいり
鶏普有七 釣桐を観するに 死も落ちなる乃
風の前ま有為の愛を悟り 電

右出しは字のうちあは生死の去来を
見渡半ばかりく驚くなきまはあゝ
称ともいく秋乃菱と雨とつましし
かりの親子のともとをあをひさそともせぬ
道芝の露の蓼あらは苦痛 復またとへ
まし旅の店 若と甚ま世の習ひかや
出ひの涙眼をうきへさりとも ひ乃嬰胸

おこたらく花を楽するに三密の流
携して根人百の高桃の嗔りらき霊の
猶乃月かみかな底ゆらきも泥を生ぬ平等か
甚まいつもとこれも熟まらして煩悩の
ミつなかのむすびわ道ゆるを出てき罪障
乃山高く生死の海ゆへしいかふいて
はせなくしけ勇をとまらんと宮なきをとさる

人百の身三口四意三の十悪おかしつき
逆道ハはしめ此法をも巳ず三密唯一心
ふかく差別法心仏及衆生と是時ハ三
無差別なるに顕ひのまへきや己身の得
悟如来唯心の浄土なるべくハ為ねへかし
はちの弥陀の道かれんとかなしからず
まらん唯頼つくるかれむをとかまろ

あまねき衆生を彼の岸にいたらんと。作りた
のりひろきをむなし御教へ数多の生き
極くた極楽のあかき宝樹の池の八功
徳池の浪乃声か。極楽の玉のとこにて
色ふかくの雲ちしきを極めそらなき
弥陀乃佛なるへし。若我成仏十方の世
界なるへし　サシ　本願あやまりたまはゞ

同上　いと我らが縁の文書も向
雲の中ならひく山居西の空の波より
むらの門ひらき浄土の光かしくまを
いまの曲舞へしと縁も縁の縁也
暁の雲くに灯乃光光を作くなりや
サシ　南無阿弥陀仏法名縁ひを叶へ給へ居ま
上　今こそ行も法むべき宝もあそ中なる

とりふねをすゝむ浅みや入りの子わたとき
けふは船にのりえのまつりとるりたひ子の
川せそさてを乎しき屋あり　とをなれまで
よ出へとをかる深いは深の　月しも
あさぬおをわすれ　母れ深ふをとうて
楫人といひ　妻へといひ　たゝいはあきよ
てまゐらうはら見まゐらせは屋あ

女屋に朝に海第本の沖とは見えて
あまねとうそまつし物ときや数
ひを屋ときて母屋子に深きうらま
うちまりはふつれしふまれ

角田川　作物ニ舟子ヲ入ル塚子　里女　鉢巻　水衣
脇一人　素袍　袴　小刀　扇　男ス　ワキ　袴　小刀　扇

ワキ 是ハ武蔵国角田河の渡し守にて候。
扨も此渡しハ武蔵下総両国の境に
て候ほとに河のかくハ武蔵の数も少なからす候
てハ猶も猶人の一人二人りても渡し
申候へく候。人々を相待ちさふらはや
商人次第
〽古郷をあつまの旅衣〱
日も

給ひし他所 花ハ東国方乃商人

承く候。昔氏雅家古ふ上りし客あさ

聞ひ出ても勤めし、唯今某無ふ悪手候

霊うちを語遣山ふ載倒してく

付く聞き出ん在もめるゝ国々色々乃羅ふ

寝て居ふ都ふ角田川渡りの舟ちやく

是ふ知らしく 是乃雅ふ角田川

乃渡りの舟ふ是て候

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の都乃て其り候ハ何事まで

候て 商人 あまた人 さのふ 御のりふまちて 女物

狂うて候 わき 御らんハ彼の諸あふの出

面 曲見 小袖 ヌキカケ 腰帯 して

絓水衣 扇 笠 篠 枝指 一巻コス

人の親の

[illegible]

円上

んハ闇ふあやなく梅を折りふれ比ふ
とハとこうなる雪の色ゆき梅の香ふ
ちそのまゝく梅く清いはくと定むん
あら定なの松やか　きくや心ふう
八比流る風ハ浪色　松ふゆとすぬ
智ひあり鳴らそう末ハ霧の世ゝ
身も我恨く屋的思ん　壹　是ハ都小白河

小筆綿くもみし山路の寄るを拙を吉野山
にも比ひ子も人高人ふ比をそれてり来
をとへ名を坂の関乃東の西も残を来
とやまても自投くと寄り来ゆ
うまつ投かまを心まで比子の絵き
我やうし仙のふなまき里を衣に
我やくらの代を出を姑と寄投ゆきそ

角

三

もとより契かりなる一世乃中の
そのうちをだにそひもせてこゝやかしこ
に親と子の四鳥の別れ是なれや尋ぬ
る心のはてやらん武蔵乃国と下総
の中にある角田河にも着にけり

シテ なふ舟人舟にのせて給はり候へ

ワキ おことはいつくより

いつかたへ下る人そ

シテ 是ハ都より人を尋ねて下る者にて候

ワキ いかにきやう女おん身ハいつくよりいつかたへ下る人そ

シテ 是ハ人をたつねて[illegible]ものにて候

シテ うたてやな角田川のわたし守ならば日も暮ぬ舟にのれとこそ仰あるへきを

ワキ たそひ

都の人と云ひ狂女なれは面白
しろふ狂ふて見せ候へ狂ハすハ舟にハのせましひそ
てまそ

シテ うたてやな角田川の渡守ならは
日もくれぬ舟にのれとこそ承るへけれかたのことく都の
者を舟にのるなと宣ハ角田河の渡守
とも覚えぬ事な宣ひそ

ワキ 狂女なれ

ども都の人とて名にしおひたるやさ
しさよ　シテ　なうその詞ハこなたも耳にとまる物を
かの業平もこの渡りにて名にしおハゝいさこと問ハん
都鳥わか思ふ人ハありやなしやと
一一一一一一一一一一一一
都鳥わか思ふ人ハありやなしやと
なふ舟人　ワキ　何事そ　シテ　あれに白き
鳥の見えたるハ京にてハ見なれぬ鳥なり

あれをハ何と申候そ　ワキ　あれこそ沖
のかもめにて候よ　シテ　うたての人の言事や　浦にてハ
千鳥ともいへかもめともいへ角田川
にて白き鳥をハなと都鳥とハ答給ハぬ
一一一一一一一一一一一一一
ワキ　けに〳〵あやまり申たり名所にすみ
一一一一一一一一一一一一一
ども心なくて都鳥とハ答申さて　シテ　沖
一一一一一一一一一一一一一
のかもめと夕波のむかしにかへる業平も

角　五

あらやさしやと思ひしに都の人をも
知らぬ書　わらはも東に知らぬ子の
行衛をとふも同じ心の　書をも思ひ
恨みなし給ひそ　旅衣
都遠し　同上　独も思ふ　玄路
にくしやさしきまらん都鳥
ゆくへもしらぬ子を東路にあまた尋ね
座もとへともまとへ我ハ字を知

鳥も通はぬ名に負へるやとひて海宮や妻恋
かゝる蛤の浜のみなきはかなき
なく都鳥も難波の江に主は角
田川の末まで思ひ忘るゝ
さらぬ嵐のちりぢりに渡しもる
あそびて世わたる身の世さへ難波の浪
しるさらぬ世の世わたる舟わかれ

やさしき狂女にて候急いで舟に乗り候へ此渡りは
大事の渡りにて候かまひて静かに召され
[illegible]程ひに候宮古の人へ舟に
乗せ候へ　商人　[illegible]船頭殿に申べき
事の候　わき　何事にて候ぞ　商人　むかひに[illegible]大念
仏の声聞え候は何事にて候ぞ　わき　あれ
は人の弔ひに大念仏を申候あの念仏

にて候哀なる物語の候舟の向ひへ
つき候はん間に語つて聞せ申候べし
去年三月十五日しかも今日にて候
し都の者とて年十二三ばかりなる
をさなき者をば人商人奥へつれて下りしが
ならはぬ旅のつかれにや以て
の外に違例しければ川岸にひれふし

ひしとたふなんかう世すへきとく志ん歟
老のなひけるそともかさねると見えさ済
物さそ〱き人をも只ハ持たる商人ハ奥へ走れ
さりましとも〱と云ひつまる役人へ走まて
よりましによりは深くにまかりつなひ給
に伊勢殊に痛くして存ぜし者ハ何く名字ハ何
此人そと尋てかえへハとハ何とやら清き

上 ○我ハきすく成て
こて是乃汰の出来
よ法にこれ
しよ祈なりて
給へかれさい

我ハ弥ハ向ひ吉田乃なかしとゆ志人
の惟一子すて乃かたすりて又にく
きまいつ世母一人ふそひまらいひしかば。
人商人家をいきなひ次第すて宮て
流すてさもて
吾ハ次第中ふそもうしく銭
ひし。
我の中ふつきのもの
うむとやに。我ハ弥の人乃足をうけまて

色嬉うは殺生をするも也唯返々もおもはすまゝ
毎夜のあこそ何よりもって然哉らへとて弱りさふらひ
のあさまさて今程は夜通ひへ殺生に至り
ては哀とも色をもひしらず生死の罪に
むなしく成て後は目出度言に後世には行法
の事に付きまとふを思ひすべし柳をも植て
は今月を日を命の月をおくる事にては

殺生の人に申里あり候まゝ出會候よ
申されは何と殺中をも見申にせらく
教諭人も此方は二きめ達とあまて大會
候を此中あれて此弟ひあまうし候也
捕經に殺さ思って候 高人
候て我おも色落腹仕ては思の語まそ父代
忘候乃人教に集るへし
ワキ
さあらは

いそひては
よりく

此方より時宜を申さうずるにて候　商人　なう

申候　わき　いふ迄なる程船を急ぎ候べく

あら事にて候へ　して　なふ／＼今の物語ハいつの事

にて候ぞ　わき　去年三月十五日しかも

今日にて候　して　扨いづくの者とや申しし

都北白川　して　父の名字ハ　わき　吉田の何

某　して　児の年ハ　わき　十二歳　して　主の名ハ　わき　梅若丸

して　扨其後ハ親とても尋ねず　わき　親類とても

尋ねず　して　まして母とても尋ねぬよなふ

わき　思ひもよらず　して上　なふ親類とても母と

ても尋ねぬこそ理なれ。其幼き者

こそ此物狂が尋ぬる子にては候へ

是ハ夢か

わき　さてハさる事とよう候ひし

扨ハ御身の子にて候ひけるか

それハまさしきわが子にて候ぞ

扨ハ御身の子にてありけるか　いたはしき事にて候

かいおろし
こゝまでくろう
くかの人のむ
ちよきみせ
よむへし。

[illegible]
[illegible]なふく [illegible] 墓所
[illegible] 今まではさりとも
あはんを頼みにこそ知らぬ東に下り
たるに今は此世になき跡のしるし
ばかりを見る事よ さても死の縁
とて生所を去て東のはての

道の辺の土となりて春の草の生
茂りたる此下にこそあるらめ さりと
ては人々此土を返して今一度此
世のすがたを母に見せさせ給へや
残りてもかひあるべきはむなしくて あ
るはかひなきはゝき木の見えつかくれつ
面影のさだめなき世のならひ 人間

ひの花盛無常の嵐音添へ生死長夜
の月のかげを不定の雲おほへり
げにめの前のうき世かな〳〵
わき上 すでに月出河
風もはや更過る夜念仏の時節なれば
面々に鉦鼓をならしすゝめ申さ
母は余りにかなしくて念仏をさへ申さず
てたゞひれふし給ふぞや
わき 余念そや

人々声をそろへつゝ母も念仏申させ給へ
さらぬ哀者をもよもかひなしと
思ふこと母の上の心なれとも
為と聞けは力なく我子の
こゝろもさすがにて
わき 鉦鼓をうちならし
わき 人は南無阿弥陀仏と一節に
月の
南無西方極楽世界三十六万億同号同名

同体あらさ佛 南無阿弥陀仏なむあミ
た佛 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀佛
南無阿弥陀仏なむあミだ仏 あミだ 南無
阿弥の陀風色に心をそよがせく 南無
あミだ仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
あミだ仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 なむあミ
あミ おいて 妙なる色も 音にくなむあミ
だ仏 南無阿弥陀仏 なむあミだ仏 南無

一 とは 昔は無き ものを 此旅(?) 世々く
以て 正覚 此縁の かなしと 覚ては
我子の 為 多く 今 一かなしき 事
南無あミだ仏 なむあミだ仏 なむあミだ
仏 子を 雲上の 内より ぞ 見えたる 道は
我子の 母まで 海ま ちと だひらり
まだ 見をせりの 世は まよひく とう

せられしハよく出ひ見過てかみ面影を
まかろしも見けりくましてもまて心志
のめる宮をもかのく陸申りまを
て親子とも見えし八幡の上品蓮台のく
めくりてあまし志しかりけれわさらの
となれそ高安乃里に帰りけれ〳〵

籠太鼓　作り物　籠
脇三人　十三ワキ　彩色直面素襖大口　小刀扇太刀掛　狂言師一

ワキ詞
是ハ九州松浦のなにかしにて候
扨も某か召仕候関の清次と申者の候か
口論をし出し人を討候ふを討へく
候へとも色々料人のおもふ彼籠者を
籠者せさせて候又太鼓の音をもつて番の
事堅く申付はやと存候

面曲見付小袖
狂言　上下扇

シテ 科人をとめし二あるまじくはいかさまその法
罪科ハ殊に情なき次第にて候 ワキ いかに女
シテ 御事は候 ワキ 然らば夫の清次は臨終せ
被囲て共に夫婦の事なれば恐ろしながら申上
申候へ シテ 妾かうかう
[籠の内]にて候 殊に類なき女の身
夫の行方は知らず候 [籠]

ワキ 実に(や)げに
あらかき
君の
女
とも
とも
その

色ハ卯の花の見えし清らん流くめとも也袖
おたまりぬ内典ハ人を見ぬめれ此浅の所
してそ いかにゐかに何とて狂言ハ有りける事御そ してそ 何
ゆへそといふにつけなす御人さんの為なりハ
風の狂言ハ御あるとも也重へし況讃仏因究
と猿りし人代ゆく為なりて法御身なる也
為世ハきよ外狂言なりぬ篇のうらやひの
園のせんかうなまめきたる梢に狂言ハ御云う
わき 実に和歌との別き薬君の心ハ言葉ぬ
君ハ歌女の狂言ハ可なる八理ある也
かゝるはくらく和歌との言葉ハ世の在
うそぶひうつて御世ぬる里出まへし
有家の出まゐ川在くにゆ也へ してそ 花ちは綱
いとも和歌ぬ狂の能に老をひあらはれ知

月中秋 あらう書きと見ゆ御座き
ならひ書の言葉うつくしき色あり知る
やさしきなれびひあとを残すとどまる露
のあとをひとえにむやききまてそらく出よ
して 此志ある難波書によれる此君
咲く八此のらちかくしてはやそらう
形見よあやつかしや 所望やとまり清行れ

君にかゝる露のうち川まして座敷
乃よの清き名取そがれしも梅橋
小円落くるの間もそひまてねならそ
うち記灯るゝ読ませて出御形知りき
ここ 家の命
わき 修里と思ふかうらく出へ
して 婚よ里此情まし御さかりく度めせ見
世かまゆりし吉舟くも我書八川く舟

まぼろしにかふらる飛花の梅かふそ　打鳴らし
柳髪をけづる風の　波よむせふらな
シテ　へふかくもさなる鼓は何の為
ワキ　へそれは鼓を打つる君の時を守る桐竹の
鼓すてまそとよ　シテ　へ何時も志る松風
鼓とや　ワキ　へ中くの事　シテ　へ面白く
是ある色を添へめしあやまり鼓を采配

時も云ふ事を云経乃寄に　時当
乃うちますつくをきみて時ようれ
君をまして　扨そくも君をあんまて
シテ　へ[illegible]鼓を撞く[illegible]
ワキ　へ[illegible]
シテ　鼓の音を帰雁にそへて　帰営の[illegible]
の竹　へ湘浦のうらや娥皇女英乃跡

同上
鼓音も世つゝみだうくもなやかしかりや
鼓乃音も聞えてく同も調子にかなひ
ふしぎや此の声もなつく六乃鼓うたひよ
いつの鼓ハ御身の数々あくなる書琴
乃門をまうけたくあはれおもひ添
のぼりやもろふよや屋もやりて学
うふよ 四の鼓ハ世中まく宗といふ事也

恨といふ事もなきならひひとつの鼓ハ
探もりし九つの鼓事にもまうけずは
やあら恋し我妻の面影にたちよりけり
やせめて言に身かゝりにいでてよりハ二
世にもひもあるへるまじ此鏡出にて
あらしなつゝし此鏡やあらなつゝ
一此鏡也
わき
へ弓矢八幡も照覧

河竹の丈婦ともにいのちをたもつべく
へしとうくおかれへし　此上ハ油断すな
よもあらじ我ハ妻のさいわい親なの乃
宰芳にあまる人あまたハそれ〳〵へ頼や
ゆらん　いしくもかくさまてやすらへ
去かとも今年ハ我親乃十三年に當りて
旅人ハ斜あつまりてもたまひし弘の

松浦乃川や狭乃海　彼岸ちかし極
樂の　源流世いきんれちくひや料を
たまへ當あそまさこれあつまり雛の法然
照や　折る時見そちら川さあまくかく
まし妻をも弱つともつれくに海里
おそ続ふ聲れまえひさふ松浦の川
や二世の縁宴まつるまくもあく

嵐山

脇 三大臣 烏帽子 狩衣 大口 腰帯 扇 調度掛 直垂 作り物 桜

次第 芳野の花の種とりし〱の山に急がん

抑是ハ当今に仕へ奉る臣下なり。扨も嵐の山の花。今を盛なるよし申来る。めでたき世のためしを見て参れとの宣旨を蒙り。唯今嵐山へと急ぎ候

都も八重霞 嵐の山もほどちかく 千本の種を蒔そえて。

聞くや今ぞみよしのゝ花は雲かと眺むる秋
人の花待つもいそなるは心もさそふ花乃か
あ妙なる気色かな　春の霞に花吹
や嵐の山に花見て花に桜を花をさそふるに
しテ　尉　立衣　大口　金篇帯　二人
ツレ　男　熨斗目　立衣　翁帯
て花ざかりも住やあらしの　手を中に咲く
山桜雲も色なる花桜かな
種蒔もとや　二人　春も今一入眺めん　花も見代

嵐乃山の花ざかり丈婦君にて候丈夫ん
御身千里乃外なれば花見に御幸を待ちて候
吉野初子の山桜千本の花の移さるゝ
てげ嵐山にうつりきて程の世までの例とて
今や花ぞさかりの恵みなり　播本のごとく
やみよしの山の御代の春の光　さかゆく
なりや九重乃内外にかゝる花の都

一又人は花八式
嵐山の花守
またけさけ花八

懐も雨に迎る月乃影雲乃嵐山と
身も波に落る白波も散かと見る花の雪
さかりとみえし花の色しきりに雪
花なる人を見れは花乃林を清め洞に
乃宝を見かたる嵐に
今は山乃花の盛り乃時

今は山乃花の盛り乃時
猶八分に それ 宝満の霊木八浅からぬ系
桐の葉乃上の林をとうひしとそれ
しきたる人いよいよ揃ひてくいはに
里に住む嵐に花の事に心は彩向ふ花を
実は宝しそ歓喜乃花の嵐山を
里をきて花乃名を知るはや木はを

嵐

此ことそ　是よう将も弥陀なれ共ふ
梅ふ花の香ねもほのかなんとの梢ハ
実たのしや　さけ山なひき流るる雲鶴
乃弥風あらなをつかうぐれうあらしの
山おりとも　それハ小もちらし風ふも
勝手こそ子守こそ夫婦乃神なれ我子なか
しぐるるや嵐山なおもちうあらしこそ

吉野の花の雲の上風ハ　雲桐乃花堂
花のく梢流乃花の今ハあらしの山桜
南ちる乃川の名清くも雲井の月の寸みまる世
水の流乃ゆうりまとそも流まは大井川
音羽ハなも樹し　く花も雲
らふよく花れ風も常ふからて
梅花乃まとき影とも弥風すそ徳へ

さしも妙なる雲も晴れぬ色しづかなる山
桜はさけども嵐乃山嵐は吹けども枝をな
らさし代も治まる時節のよのまゝ哉
ちはやぶる神もあはれも三吉野乃山桜
立向ふ雲に打紛れて夕陽移る嵐山や
南乃木の下にうつりまよへく
男　金風折
天女　鬘帯
黒頭　長絹　大口　腰帯　扇
天冠　舞衣　大口　腰帯　扇
二人　桜ノ枝持
三吉野乃く手

花の袖乃梢へてあそし山河たる
袖あそひめて舞の袖あそひそめ
てまきく返すの花よりも白
雪乃色を里縁えれ恵みや桜の色
あらし嵐の家にく小倉山も見えたり
向ハ嵯峨乃原さゝは大井川の岩縁
まなこかわ繁山もみえたり川

よくやさしく絃あそひ　上　楽
あまね絃楽の清らかなるをく
らきうれ被を誘しえるかへ舞楽
乃妙曲をたいきなれ感無肝に眩す
御折から　上　ふしきや南乃方よりまゝ吹く
御風乃吹きつたへ瑞雲たなひく　金
色乃光まて輝きける八葉の蓮摂取乃来

照かやして　納眼　赤衣　法被　同上　上　和光利物の
二弁匹　伴切　勝常　扇　寺上
姿くして我和光の結ちおてふもと
んとう二乃蓮の御しりの蓮胎西現乃
をむかさは　して　悪業の蓮の菩薩をまた
深く　円　さて又座前に至て揚て悠
若衆の紛惱をもちひ　同上　悪魔降伏の
尋やうきゝんの身を御はかく光明をもすゝめて

雲も照し衆生も照る光ハ
しあまりて龍王権現神々も
ともにあいぬるまゝに舞かなて合せて舞あそ
ひの山ふもとの里迄も照
ふけて嵐も吹さそふ家の光
もかゝやく雲の松ちりもしつくち色
の松のかけゆく松そひさしけれ

白鬚　脇三大臣　烏帽子　狩衣　大口　腰帯　扇

次第
君と神との道すくに　君と神との道すくに　はこふあゆみそ久しき
抑是ハ当今に仕へ奉る臣下也
扨も江州白鬚の明神ハ霊神にて
御座候を我君奉信し給ふ告ましまし
ける故急き参詣せよとの宣旨を蒙り只
今江州白鬚の明神へ勅使として参詣仕

上 者九重の雲ゐをはなれ出る月の如く。

住む都はやそのまゝに立出て

こゝはすまの入江の浦つたひ浦の浦風

さえ〳〵て立浦浪も白砂の上にかゝる

すゞしく見ゆるなりけり。遠の波に白鷺

のかたに見えて渡る舟。夜ぶかにすゝみに

ていしと 尉如常 釣竿持 男如常 釣竿持 釣のいとなみ

上 まで遠く波まくら。棹さし渡る

浦遠き小舟漕出る。浮世かな 風

海帆さく浦。万里の漕ゆく時

としてまくらたもゝちとかし ハ

下 とくまれてまの袖かりけれ。しも

と雲の空の夜深くて。峰遥白

舟のさく花の。あしも南に図影くる

下 やしさ海士乃くまて来るらん尓あ
かゝれ上 春 ふかきの山風吹まよふ。
く 漕行舟の跡見ゆる明石の浦までも
するくと霞わたりて天晴海あく
ちれ山もおもかげよれ見えわたりし紀ゝく
わき いかに是なる翁汝ハ此浦の漁父にてあるか
して さん候是ハ此浦乃漁父にて候然りをく 沖な

お物語とハ御れハ浮海安と見え渡れハ浮あり
まてハ見ん月中さぬにしもぞ色くたん
浮ゝ未詩作やらん わき 実よく見てある船
日本人ハ唐土に住へ人の作下なるか。左
あしきの浮異いか詩告海ふまてみよら。
唐土乃詩の動使まてあるそ也よ して 何
と勅使まてハ唐土や わき 中く乃事
三

まことや是として身ぶ儀をまで敬ひ
おふしき神乃御威光の輝きかゞやかれ
継を延喜乃この御すゑまでさくら代は
和国の海乃ふかきめぐみもあふくなり
誰ぞふ誰とても是をあふぎ神ぞとや
まのふかんあふなるめぐみにあつかりきたん
猪変家まで不動ミ清家乃中色経

千乃日影のくぐ神の都ハいとこそ
も祈りさりけり宿ふあらかたや無礼
ふしや我まく色なきも弓箭乃都前
の勇みしも盛ゑくたのしむ心やふかく
生れあふ身こそくるめくぞれやしき其の
おこり家の傳うてまつく別かし
で是統まらくなりとそいとも賢

統さ當家の一儀によつて天地治るの
達て後ず九乃宮んちう人皇三萬家
此時　仏法世界を照す世をおさむる時は
大聖釈尊もきたまへて都率天より
降しましゝ　我八相成道乃後雖殺
流布の地ぞ定乃御すゝ所へきよとて
此南瞻部浮刀をあまねく飛行して出

淡しるる八潘と伝る大海の上に一切
衆生悪業煩悩生死常住を遍
易乃波の上を舞ふ乃蓋々瀬がまゝ
てびとら此浦とよるど乃大宮権現の
波の底なり　其後人皇百職のいにしへ
悲達と生れまひて八十余乃主乃
此濱に西南方嶋のそわたいの波とさこ

え給ふざりしとも仏寺住ふ滅法盛乃と
毎辞る縁てむかし蓋乃契ふの深と
なりしかれ人ふ也浄縁人さかるふと
きかうやあきあり様その見えと乃
濁代あれと仏法の名字をも人知らず
ある比叡山乃ふもとちかうやさゞ
乃浦のほとりに釣をたるゝ老翁あり

釈尊のまへふ向く翁もし此地の主なら
ば此山を我にあたへよ仏法結界乃地と
すべしとの給へば翁答て申しけれ
人寿六千歳乃始めより此山の主と
して此湖の七度まで桑原になりし
をも見さくみらし翁之は此地結界
ならば釣する所うせぬべしとて

く惜しミ申せしを釈尊もちからなくいまハ寂光
土にかへらんとし給へハ時に東方
より浄瑠璃世界乃あるじ薬師忽
然と来給ひてよろこばしや釈尊此地に
仏法を弘め給はん事よ我人寿二万
歳乃むかしより此山の主たれとも翁
いまた我をしらず何ぞ此山を惜ミ申

べきぞや開闢し給へ我も此山の主と成
ていつかに後五百歳の仏法を守るべしと
かたく誓約給ひて二仏東西に去給ふ其
時乃翁も此白鬚乃神とかや　不思議成
とようをとすて妙なる御秘事を語る翁乃御
名ハいかにおはしつるそ　とハ語りてもかくむへき
其古も語るとも翁成乃執心を遂めさへ

爲唯と宣ふ未たら釈迦出世
說け神前にまつ現の時景なれや眠りく像世
謡ふへしと夕れ雲も立さり紀くに汀に
ま嵐く渡る緑の高き浪も喜ふ
鈎の翁と見えつるか我白鬚の神とて
玉の簾をおし開き社壇に入せ給ひしかとく
八乙女の迎へてたちの色く不さす鼓

太鼓 本ニ

色好すそ神さひ呈れる折から天
面悪尉 白垂 烏甲 狩衣
狩衣 半切 腰帯 扇
神ハ人のうやまふ
よつて威をますしれ高きや貴き動の德
あふきても猶あまりありきや
社壇のうちより色も御まる舞
よおし扉をひらく神の御まる
やさしや白鬚の神の御すかた

きおもしろきこのはるやゞ満ちてくふかくふかし

至 こゝろも呂覚え乃みけそと感涙袖をうる

ほやりはきくさは錦夜錦系の掛

を募しつゝ勅使を触やさえと訴系信

るゝ系ゞらくにく京行の役ゝ秘掛を

恵し拍子ぞそ顔色く数拍乃錦系ハ

まる難や 面白や此錦系くの綾衣を

のつらう儀うり浪のおとに松風ハ琴をあらう

へえんねんをきまりうけに天津乙女乃雲

ねりゝやき波の瀬川の面白勤すハ天灯結

姥乃まかりや

天女如常 大姥持扇 甲笛

彩神 天姥拾扇 大コ打上

天地乃

安姥御まて く神のまつふる御姥の

光ゐ河者の輝き波の日本のまつりの川

思ひまはるらり角て数とをやぬゝこの角そ

よもえの時まされば音も明神は治まる御代と
やがて御神も御声をあげて喜びぐく
と感じ給ふ矢は天地に又立返る誘ひ
時のよふかりて海も音をたち
て天地に別れて雲ゆけば明りも色
白妙の浪の色白妙の色おさむ
静御代とぞなりにける

難波

脇 三大臣 烏帽子 狩衣 大口 掛素袍 脇扇

大臣次第
ワキ 実治まれる四方の國 関の戸さゝで通はん
抑是は當今に仕へ奉る臣下也
熊野にまうでばやと思ひ候 風枝をならさぬ
民の戸ささぬ御代の恵も御門の
都に摂國津乃浦に着にけり
て急座の旅の道を暫く

思ひ出も播磨潟高砂の浦に下向ふ行くへやゆかし
峯も心に付く雪の時ぞ久しき
やがて此の国名にしおふ播磨の波も立
あまき思の海の底も尽きせぬ
松をの浦の浦に着きにけり
須磨に着きや播磨潟高砂の浦に着きにけり
実前に但世浮世の市さす事に西蔵寺

松風も心に住吉の市に出て
出御也
支度ん千里の舟を遂げん家ハ
和も住吉の神とあるハ海にあまき松て
深き心かきその松にくに〜く世まで心
しき名の三弦声ハ深くも同じ田の下枝もまたぬ
亦そ称き遠く市に出世の月西向き
松の風伊勢浦塩干にひろ歳もなく

ニ一一一一一一一一一一一一一ニニニニ
倭えにのりける代御代にあふむの玉藻の台
ニニニニ一一一一一一一一一一ニニニニ
時しも生れそて民の成たのしひを行ふ
ニニニニ一一一一一一一一一ニニニニ
たへむ秋津しまやこの唐も論なき竈の
ニニニニ一一一一一一一一ニニニ
市にあふよく　而代やむ先成市
人を君進ハ治め唐人成るハ大和詞也
又こきん集ふ玉をとらへてうらそそ
も此身ハ皆なる人ぞ　もかの御代そとある

き集りて又其花に指よる玉ハ新に指さる露
自ら其詩女の露珠とおもひしおされにへ
其ハ花に擬物して雖しく先
浪高代の志るしハ何人も山よりお宝人
己出世を高初人也擬妙夢ハ治国の道ハ
加様の事を擬要し寿を春申へし
そおもむるしき他の花やかな唐の則の玉

ちゑ寶珠の外ハよきものなし花をはちあ
わき
浦まで乃おもしろき様へ乃
もしや宝山ハ報ハ宝にも世ざる宝珠を
我先ふいはれ宝 たまふ宝や海
わき
唐西を小し乃海 まづきの東の
渡さんもの わき野ハ迷出家信者乃 外ハを
ちる乃 わき たちくふ 同上 寶に御幸を信者の

外ハを宝あれハ乃ま此ある事ゆへた
なるべ代乃光そ お世まれここき
御家市此数らすに 宝れをへ小金さ
すく信者乃讀の市寶乃数を寶やらや
養此数乃一時の金をおはそをたべ金
ら信者乃 せうあるへ金銀珠
玉いうまか 同上 手類万類乃玉衣の浦ハ

津島乃宮様 へ立帰るこ様とし
うきたしをうつかさき紀の へんもとふ神
あや衣 ひし住立夕日の 影もや浅
涼しさ 住吉の磯は かみやあんゆて 松乃木宮
ゆく行舟 よろ出家ら 伊吾志賀
引波はなくくよら松吹風はなくくぐし
てさゝめきとかく聞らん雲霞乃をとの音哉さ

かゝる磯の月とやうらと見る花よりも風さに
面白乃浦の夕しらや 又君舟のより
来り候 さも君舟はよく家とくは候
花の平家やら舞 身に慈人はよもた
拜し天も納受し慈悲の宮とも
さる事やさんど海士の君船雲乃波ふ
二度り乃こしは宮乃御舟もしけと事ふ

よろへきさわり　とハ何かあらむへき
く　ぞ君か舞も満よせし海青乃さく
めハ我そかしとひゝける海青乃君か私く
へく住吉の御神ハ家檀住吉乃書のみと
里見室乃風ともに未ふ末ぶりく　面白眼前誠　赤沼沙袖伴切
久堅乃君もとゝめ神代の秀久し
我ハ又下界にすミて　ねまひ君をまち

住吉諸神の詠歌之　あるひハ神代の神遊を復し
又ハ旧次代ハ御く　たゝ此君か舞を正し護し
里　執も折りや　く此君か寿を守る
波の鼓拍子をそろへて　えいやえいやえいたう
えいさひ舞や君か舞　あまりなき光　波の上
鼓　ていれ拍子を打ちやちらちら
今思ひて住吉乃松の風吹くよ　ゑいゑい

さゝえはさゝとゆふやかゝるのくらいもちらる

浪に紫てハあの玉ハ須彌をも飛行し仏法の縁

をもふそらか浪を擢よりも漕波に紫て奇居

周彌度衆生の為に衆生済度法ぬ敎

を救方の揺抱もこハ我やとの如く金銀珠玉

八乗のみらく山崎とくに法ある浦の舟をせよ

八万法まてさる繊る御代とそ出来の為

ワキ

自然居士

脇二人 男素袍袴 小刀 扇 つれ同前

是は東国方の人商人にて候我此程都

にのほり稚き者を一人買とりて候此比

聞もやてさよつまを候ゆら来ゆうすれ候

へハ雲居寺に自然居士の説法の半

ゆゑ若くさゆうの一へゆくやらんと存候

く尋ばやと存候

万呼出ス 大夫喝食姿 水衣大口掛 扇 珠数一 カく シテ 雲居

自

一

寺造営の居士ら流法。今日結縁と聞まて
あるらして ゑらく流時剃に成し八宗伴官産
にはらり。發形の歸お嗚し。深き数向
一代教主釈迦牟尼宝号三世の諸仏
観の薩埵ありて申うさく。無弥命ろ槃
善心経 ゑうく して 数自受習諷誦乃半。三宝衣
僧の法布施一裏太志ら三観聖灵旧縁

菩提の為、弟乃代衣一重三宝に供養し
しまゐ。阿ら両息弟の代衣也らかひ
ららか。彼爾天乃會母ら叙を備ふ任
養せし、色。弟の後の世の逆善。今乃淨
菩を観の為 弟の代衣ら免しき
浄世中をとくおて。先考先妣のみ
尊ふ都る。しきに生まらんと請あけ

自

給ふ自然居士ハ墨染の袖をかへさせ給ふ、
数の珠衣もはての袖をかへさせぬ人ハな
しく
わき　されハこそあれなる者をきゝおよふ
き者すてハあき[illegible]
みたてとよう　やうにてもあれ　わき　やうの[illegible]
して　居士ハもつと掟ある者ニ細れ[illegible]と
の風情よ男の代をかひあるハあれ[illegible]
人ハ男とも見えす女にもあらす人
とのあらきなき男ニ人商人すそなる處
し掟ハ海かくこそゆふさき浦そ　して　きこいや
くおんちの物なきもすそふ言ん人ニ
になへし居士大津松本を見ん人ハ掟き
さか袖をとらし今の松さきなれ人なまあそ
君をすゝ浦すてハ　して　あそく宮に説法の座なりな

らふするよ孔ぶ云ぶかく説法にハ善悪を
きくしめんか為也ぶとの御きなむ人ハ若
人あ化人ハ悪人よそ善悪の二ツ存する
につきたりきかふかん説法をきすて申す
願以此功徳普及於一切我等与衆生皆共
成仏道修行の為なれバ男も女もすて
人をたすくへし
ともかくもそこらを

して
やあ彼れは山伏をうやまくらん 私を
えらりさて法乃尽に達すれバん乃那
それ
なふく甚私ふ抱申さふ
わき
先ハ山田矢
さて彼し申すて色取し 彼の男は申乃
此男なるハよ法を出弱りへ
して
我も旅人
にあるよう逢ハ彼の私をハ申さバうさ
此男ふ抱申さう
わき
扨は山伏を何者也

[illegible]

シテ 舟人かひ船の事はよ

ワキ あら面白し何とも シテ 書たりしとハ

道理く甚船の櫂乃事はよ つれ 櫓

小舟かゝ縁をのふよう河まし人のひをのふ櫂

ゐなきふ シテ 夫れ櫂乃起を八一霞二

霞一塩二是不知んといへハ今漕そむ船

わき 知まハつひ舟と八繹事か 室(?)面(?)く

をはへらまたりけるく 何れは用いも

シテ 芝生自然居と以て流麗君なりけり流はの

端をとも波なまつ流振りに漂りくひ 地 流

法よ八道理との座添ふ諸本に繹事ある

まのをと シテ 仏(?)事まハ我らもとよう茲ふ

南ふ立との事ゐく有繕ゝす備に漂まき

てかゐりしと。をすそを波ふひをし月

船もくこにあつき门ども渚 わき 〱腹立

去年かり衣小そそれてええるさせ 若し

沙の料そもして櫓櫂をもちて頼まう

して うくまて舟の出さ浦そもしくぬ

よ浦り わき ーーー何しても〱戒(?)きそ ーー して にーー

立されそ わき ーー身ハ縄 同上 ーーー 口々ハまさの ーー

書をもめさけへと舟の出ハふう ーーーー して あう

いふかし[illegible]断くつまく海にそくしあく

岸ハ近へ わき 若き舟路の首途見て此まへ

何と[illegible] して 此にゆかく

是ハ 自然居士とや 説経者[illegible]すすふ七日の

説法を破りて若まて立もりて[illegible]

居士に狂りい へ親報に言へ廻し たりけ

わき 居士は是まて御出まて御結小第し仕度

自

八人へ生死あり中にかゝるとき大法の内

持者（の内法ハ）木とやせ法すてまゝ　ワキ　へ人成

常にあくニてもまかせぬ法すては

内法の上へそかくゃふ及すは文は法の如く

衆生の中ほとかくる法乃作　ワキ　へ其（の内法ハ）

何とも不知　シテ　へ如来は身を拾

此まゝたま一字ハ書間く息まけ稀大

家をとかあきあ見これ祥すてなきにや

妻へか色ぬ大法すて内好にハ力なき乗

何事にはちまかて地下ににく我身女八

ハ法の式は船をもおき事ハ論　ワキ　へさ

是らに添ひよりて持許いたさう　シテ　へ持許

自

とハ何事　ワキ　へ承をとらう　シテ　へ安く申

捨身のわかちを信得家をも

七

迷ひ〳〵是にハ自然居士とよんでさ
すてあつかふてハ扨簓ハ何と作り居さ
居士ハ簓の上手にて常ハ
て簓にならす彼者をかゝへて申
是りとも簓ハ簓の古きゆかり竹と申
簓に成ふり後をそふきもちいすてハ
扨自然居士舞ふあらはれ候へ

いやくるしからす舞ふへき事の
事にて候ふ…
…
居士ハ簓の上手にて候ふ程に簓を
なまふてみせ給へ
居士ハかさのよく流
理をこそすゝめ簓まふたる事ハなく候

ワキ 竹の葉しの／いさゝめの／たゝく／舞なのおう／かの花をな／かゝてハ／いやくるしからす／ワキ 舞上手にハ／又舞よのゆへ

わき〽河ゝたゝとおの流難やゆれ行旅の空
田舎ゝやけの家引しの近江を定めして山
辞以へ してや〽山も見しきも有のやうし山
わき〽りん 春木の辞わか南の家小なきを
仙陣の一段とあわしおゐ水にも山 して〽面とき
飾りかつまなる渡里山 わき〽何れつまお
よはへき してよ上〽志賀辛崎の一松 同上 雑要

人乃心の花の 辞やき〽 三位打上 おもてふ辞のみしらふ
てたうぎてはいかかに して〽何ゝいはるてふ秘の
[貫樹殊斬] ゆへ〽 おこりをかけてきそ
してさうき〽 家人の文字を
同上 以へ哥道にあ里 加まみはきんや
志賀の山辞にいふ海を渡て貴へき處
曲 キリコミ
色あれりしに 古今序 此は木に貴賤
とい〽古今序の時貴賤流上の池

の雨くもさむきを秋の来なる
に庭上風にさそふ柳の一葉水にうかみ
しに蜘蛛といふむしを屋上に落ち
流れ遠く一葉にのりて小簾にうかひ行く
般れいとさまなくも柳の葉を吹く沼
風に吹かれて行に今まし秋霧の立つ
蜘蛛の糸かけまはし實寄せ吹細しらるく

舸ガ

昔く貨狄といひし臣下黄帝にかしつき
く萬河を漕渡りて虫を見つく
初て河を渡りし代々を治め給ふ事一葉一千歳
とや継き名舟の世ん世ん字を云ふ
さてもむ書にうち文字の舟舸もすまう
舸の字の字はち舟をも一葉とはいふ事也
以字よりもて取りまつり文書の以て貨狄を

シ舟

鞨鼓鶏婁と申も此代よりまさニ後ま
鞨鼓ハ舞をうつ時鶏婁舞とハいにしへ雅楽
てハ日本の神事に編木をもさゝくハ
見せしへして 編木を結しへ わさ 舞の
をもおく以猶ふ。ゆくハりてゆハ して 国
此頃てハ編木のおもむきを試て皆世中に
し 放佛の雅楽古楽ひしを一切衆生

をなさんか為也。昔ハ文此君舞へふ男
をもちて骨をも砕身しげく又編木のをもさもを
為わるふ東山ふあ満僧の扇もとより
木乃そよぎしける校珠ふてそもそひしをも
さゝら也編木とも云事ぞし浄のまするまゝ
甚しく編木乃ニつより百八ツの数珠にて
の行ふる扇の骨ひとものしをまへしるもとる

所は志賀の浦[illegible] 大小 [illegible]
辛崎の松のうは葉を[illegible]
さゝらのまねを数珠[illegible]まれハ編木
より[illegible]もさるものの今へたすけて
[illegible]ひ給へ ワキ とてもの事にかつこを打て
シテ 御見せ候へ シテ 此儀はやすき間の事となす[illegible]
[illegible] ワキ
[illegible]

ワキ [illegible]かのとをつれて[illegible]

[illegible]

同上 ワキ もとより鼓は波の音
[illegible]の鼓は波よせて岸を
とうとうとうつ雲の鼓はふな時雨の
ろく となる時は[illegible]の雨は[illegible]
はらはらと小篠の竹の編木をすり[illegible]

おもしろや法乃庭今は峯捉の梢にいさ世
の僧私乃うらありていとうら法ま
てらも小お小のかりきもとも小お
のかりの刊

東岸居士　脇男一人　着付　目　素袍　袴　小刀　扇

ワキ詞
是ハ東国かた乃者にて候我此程ハ都に
上り洛陽の名所旧跡一見仕りて候

いかさまこの程に一見仕りてはや

又清水寺へまいらはやと存候　喝食　般若　水衣　珠数　掛絡　大口　扇

電光朝露

ひろしくゐる

宮も世ちと池凍て　松あしたかくれ

世中ゟ乱れ　出る月影を小車乃く

及残傳さらふ白川のくふりけく搖枝

立身ひまるきるく　いふに

へきまの人見ハ西及ゟ為東層居平

までわうりくう後ハいわやあんゆし法をと

見れは峯も東層屋ま楼

今同いかうる鞭や文のゆへ金　さ出てあるこ

ら発同と代雅ゟと川蕾半ハ皆聞

おの乃様書るれしハ柳ハきとう花いくれない

あゝ面白乃都の御きやか

のこゝやひえはえしハいのゆへのかけるひろ

擣りて他そ　見ハ心妙

自然居士の法事の次まとまり

く渡したまゝ　擣あれはとと文りゆう

みさくも梅也

ワキ上 さて〳〵東岸西岸

居士の里はいつくいかなる人の又ありをも

あはれしある家きや シテ むかしの事

せめてひかふやなかゝりきた命をあけ

まこと出家をいふへきいはれ色あし 出家に

あら称は菩提ともそれ殺生よさよふに

そめ色せ衣たゝなのつらたふに入へく

ワキ 善をも忘れ〳〵色 シテ さてすは ワキ 悪をも捨て

色 シテ ぐゑまさ ワキ 折ふし命とふに渡

つきて何に シテ かゝる命ゝ ワキ ふかし

いは ひとの 東岸西岸のやなきの

いつく〳〵命ゝとも重枝 南枝北枝の梅の花

ひとゝ命法の一筋に渡しんための橋なり

はせめに入法かゝ乃いつふ取りかへ

山川のよくうつるらんさくら梅かゝを
以て 実に芭蕉女郎花なとやうやく経
仏性は非情の上にあれは人の心の色の
かはりやすきはさくらんとしても 同上 此法の舟
に乗りかつまさるみちのへの露にてこそ
、して上 面白やあれを胡蝶の夢のうち
同上 おもひたりしまふともや せよ小文

同
まうきくおもゆる胡蝶の舞をさ
あら嬉しの御法やふたゝひ世に経て
とりや して 個僧もあゆくくまはり
生きとし生ける 同下 かろきなれ花も夢き
されともすゞしめる八つを離れたる して上 も
けふもれし月もさしても 同上 あらやまさ八
東念遊 して上 飛騨の山にまゝ川となく 同 船

悩の雲あつくして佛日のひかりも遠
かりき　生死の海ハ、ふかくして出
明の波あらくして真如の月やうつ(?)て生
をうけ海にまよはせて苦にくるしミ(?)けれけ
かき(?)縁を出かゝ窮りきてきくるまて
ゆくらきに相りもくさたのちまくは
懐よをね下も苦く生死のとわそに釜(?)

らねさとこのあし生死のてん㒵んをは
蓮(?)學やいちん文うつとやきんかれるを
いんとされし雲とのさり旋と浮てのち
至(?)經ととも心へ色あし明もはんとき
れし文思堂の中んとすてく勝ちら
果ねとどとこ(?)ほとふ事あしの志ん
のちきりの枝にハわか孫をハ慈敬の焔に

う世らし釈尊大釈尊のあまねきは法にふかう
法事ありしるんまうのふしぎのひかりかな
こちやは慈悲乃あらさふうるなきたせう殺
つかさどる殺つのそのわざは殺ぶ志の事
あしがゝるつらぬき勇ちに猛く殺生
ちうたう邪婬は勇にむかひて猛く有
つゝあり妄語綺語悪口両舌はいかにも

花飛揚りさんよくさんいちらつそんにまた
ありて琵琶ぞ潯陽乃舟のうちまさされたみ有
かの舟にいてうん迷乃事に八相あれて
ありさくへ して 雨もや松風さつさつとさ
して波の音ちうちうとすぎ わき 雨は名
にしおふ潯陽乃あつめしおきし白河乃
して 波のつゞみや風のしらべ わき 琵琶の

椿の上 〽男女乃法華 〽上中下の
〽袖をつらね縁くたま衣のさいく志つゝ
うき波乃ゆらゝハ椿うちつきて百千鳥
して 百千鳥さへつる春ハ物ことにあらたまれ
ども我ぞふり行 〽雪ハ白河く 〽椿を
〽まてむかひハ 〽楽春 さ扇さハ 〽翁
鶯ゆ波ハ 波ゝら まちあへて

円上
ミ 川まで色く 椿柔乃さ舞の
まつ乃海清どはきてハ志つまや旅人よ
くあら面白や 〽あふ萬歳ミ寶 宝
千歳色ミ川ミも華ひらきまき 經箋
ふりの椿柔のさそのあそひを物とおも
〽何とたゞ 雪やこおりと成つらん
萬法皆一如なる 実相乃門にいらふよく

わき付

谷行

しての女面 唐織 扇　子 小袖 長絹 扇
脇 山伏 以下 兜巾 衣 大口 小刀 腰帯 扇

是ハ都今熊野帥律師阿闍梨ニて候
我等か坊に学入候と住候ハ文切と申子を一人持て
候か父にハ離れ母一人にそひて候か此ほと
彼母の所に立越彼者に暇乞をせはやと
存候いかに此内へ案内申候
子　誰にて渡候
其屋師近の出来て候よ
わき　何とて此程

谷

ちるとはいかん元ゝぬるそ　子へさむは母この風の
心地ホは入らは猶ホ母あるさらは　わきへ何と母は
の風乃心地ホは入らはやかゝる事のよし
申候へ　子へ心得申候いかに申候師匠乃御出
参りては　してへことに今日ハ峰入とて　子へ由すへは又
わきへはいつもの峰入ハ松若を伴ひ申
申ていは風の心地ハ何とも候そ又峰入へ

仕り候は勝手の為ホ来りては　してへ何と申候
峰入とハいかに申やうなる事にて候そ
申ていへさて松若をは残し候　わきへさん候峰入の
峰入と申すは難行の道にて候　おそろしき
すの修行すら思ふてハなくは　しへ恐くハ
我もとて供申度候　わきへ思ひもよらぬ事を
いかに師匠に申候は何事かと候はそ　子へ松若を

谷

嶺入の山伏と成へし　（わき）唯今も母御の御
為にて候へとも、おさなき君の修行すへき
路にてハなく候、其上母御の風の心地なれハ
おかうさく此のもとよりねまりて候　（き）母
この風気心ちにて候へハこそ此峰のため
母のやうまゝ申候　（わき）母ハ此嶺の為とハ申候
ハ宰相母御ハ申候へし文まてハ　（して）御覧

[illegible]
（わき）松若今度峰入に御供せう
まて御師匠の只今もいろいろ申とも、おさなき君の
修行すへき路にてハなし、其上風の心地
のよし申候へハ嶺入山伏の為と師匠にこそ
母何とし[illegible]へき見ん此度此母にて候へ[illegible]
（て）見えハ松若申すこし師匠の山伏と峰入
[illegible]

文ふと云まし　叩ようずく我ク子の契さ
さゝんだ杖柱とも頼むむかしの身ふそふ
御くふみぬひまハ露ぞとそすふ色まれ
せふん残らんへし唯て思ふ扇り心へ慎
高師直とぞて心へ左ん生とあて堀にか
へ身ハ難めの跡ふ押て母の恥母をも打ち人と
せひ立て済いらなりと　書くと紀高

其年も師直も母もともに表着の
乃姫ク伊や浅なれん　仕な主公ハ分ふ
師ハ師直の所佇して中々四ふ心
やか高高さみの心をと中々生高見も底々そ君
くや足峯乃底まとら妻文たひの命
思ひとも出でもとも西ふ立たし里の御色
まくあへ文にやう　別なれまし乃後来志れ

いはほのみちもや風ふきあん葛城や高

間の山ぢ嶺の雲晴ぬハ秋のならひ乃

名残もおしきさよいの月ぜんく

作り物 脇坐中ケリ 出来
大臣小刀扇 松若つまとり

わき
かくて行者ハ日のかげ入来山伏の

わき
篠懸を 苔の衣 まくら思ふ立居の

途をはく たよりをみえける 聲音

もみぢん里家にゐるハあかき月かげ小柴てゝ

二上や宇治の山部いてうふこのみゆる

川かぜ風さむしと名鳴ならぬ森の

夕なまよあそろふのゆふへなまてう嫗

さる程に夜もすがら月ぞ澄わたる三熊乃山路

さしもくぶ布留乃郡松も紀乃くに高橋

乃山谷金剛山にて誰もわか岩とちくさめ芸

むば玉の黒かみの苔衣かくしてそそむ高葛

一 残る霧より嶺の雲路を出るやと
一 こゝ 一 これ
里明りきぬれ　わき 急候程に是ははや
いちのむろに着く候と申は分に逗留
せうずる事にて候　つれ さうにて候
子 いかに申し候
わかへ文を見の候　わき 何事にて候ぞ　子 よへより
風乃心ちにて候
わき 嬰は是の程はそれに
中さぬ事にて候へ共今すこしなられぬ旅乃

つかれにて候ぞ何事も候へ共　小先達 いかに小先
達へ申候　わき 何事にて候ぞ　小先 松若殿風の
心ちと仰候に何とて候ぞ　わき やうやうから
さん旅のつかれにて候　小先 扨は問答たう
ば、かゝる道の　同行 何事にて候ぞ　小先 松若殿
風の心ちにて候　あら心もとなや
ゆへはなれぬ旅のつかれにてぞ候らん

△ 風のこゝちよ ては□く

△伯をもえはんにもの條禁定まらざるかてはほはおはにする也。

よし伯は〈へ〉いとも見えず世ハ條命不定とは見えさ
世はたぐひはなき何とはへき法師しく若う
不おこる事ハあまたとは見え〈〉中そへ更ハ其様
寺ある児遊へ中伯ら寸度もそはいふ中は伴る
みてはそ
松若度風中中中中
よし師久へとも見えず世ハ條命不定にてやて
させのひそはいつとりまかうち大僧ハ小伊世若ハ

此ほと迄ハあまたおの〳〵中寺にてはわざ名
師もまたは寺をめでは叡山へ参り
子細ありて松若は中きらせうすめてはいふ
松若まし〳〵に関東へ下りに
病気すすみ若君ハ若のとてもすみ
もし〳〵またちまち命を
前のとの大僧あり
下一二一一一一一一
命にかかる拙者ハ

此男のためにさそん男は何の命をも惜むへし
かへすかへす一念退きはまりてあらぬへ偏
いさみて此へたはかりに出し命を捨んと。
思ひの関の入る身をつ川へふかきことを母の
此親の名をまて身をすゝめの身にそなまし文
ひきそめし化生の縁に肌はなれぬ御すゝめおし
行此へ　何といひ盛る物をもなく皆まま

さとの縁にもせぬに乗へして　三元上　かくそ
面々一同に家の門ときゝ世の理ハ何も文芸八法
此あきれつまりてろくきまりし芸にもさ
おち身ひさ身　わきへ　光隆をも師弟は数の
中なりとも何といひ盛るかくらもなく　三元　寒
今へくとへ　同もあやなく　同上　や　泣濡世を
ぬ乃なりとも身をもすゝもかくも

なくやとむふさへ命のあとをとゞめし枝か
わかれもとりて命つきぬ生別離の命を
中く死別なるハ後の歎きよりもあはれ
一切うゐ乃世の習 如夢幻泡影 如露亦如電
應作如是觀のこゝろをもさとりてやすく
色代乃巷の名ふきむかしの門を出
苦縁て彩露もかゝる三界の親子おん

あひの歎きふかしかりき里角時刻
色携て見ゆ面にも光ひき添邪見の
浄何き身をもて戒行て浅く人をも六
しき苦に落し他生の如き歩や苦痛
あめつちに生まれと世間のくるしみをうけて
阿鼻叫喚に泣て旅くく 成
や嘆のみてのいのちも生まいつや嘆の

てはなは白玉椿の八千代経て候　ワキ 昔は八百年
白玉は禁裏ハ絶もふさるみちにては　シテ 昔は
禁にて候へ君ぜん達の白玉なりとて御ともに余
の山伏の立所へさす　ワキ 仙人の禁遊にて白玉候へ　ワキ ぜん業
して色に候ん候へ妙ニ中ゆり彼老に比丘尼ハ[illegible]
きや八へ[illegible]色[illegible]色を物めし[illegible]
[illegible]禁に色ゝ昔ふに今ひて結り候へ　小光 御読き

都ゆく候ハゞ[illegible]に変り候ハゞ　ワキ 何事にて候ぞ　シテ 先
達へ白玉を奉ると申候へハ御前の御読ニ出
痛乱禁[illegible]色[illegible]しまたも先達なにとも昔の
ふおこ女ハ中女のみ[illegible]御事ニかく候か極位も候ハ
[illegible]　シテ 先達の御読ニ色ニ候て御禁の春ハ等
月比の[illegible]色ゝもの為ニかくあり候へ　ワキ 見れハ
さ門く松の奥を[illegible]ハ[illegible]世ニ中あ達り

と為は 小文 さやう此堂にやさう

するふくびにて此堂ふやには わさ 何事すては

小文 若やん寺は八は難さ起すてん年月の雲

ざく色やうの為すてらはへつ形は成

まえ松原度と二度その世に沙世やあまて

と若や左寺は わき さやうの安とう守すれ

高らは 此山のさん神こおう若神なし八ふ

西勤助主此さりくふ夕幸て松原を二度そ

せいさせやとうきをわかくは若力をさへ

く沼りは 光 人向やは 三元 梅色師道の重

総を理り為通まさ度ちをかん守色同しん

わき 久寿まるも年月新をよくるさまさ身ハ成

勤助主此盛 三元 又ハ山神こおう若神

わき 津くハ開山忍んのきそく 三元 あひさん納

わき〽そも〳〵是ハ　役君乃鬼神のきかくきしんよ

ちぎりしたがひけおりしまも　行者へ　面 悪尉 頭巾 狩衣 大口 又杖 一本

まんきやうの山路を[illegible]しくまて[illegible]三と

くわめ[illegible]あんと悲しや[illegible]るいかに此家の

上すいまゐの月ゆかゝかゝりてはいらぬ風

ともまもしやさやくまくむゆん[illegible]

さまきやうそんふかしきん[illegible]やうきん

上〽いふ〳〵両ゝに従はゝ彼童子を[illegible]となる

親孝りの人神[illegible]もちまもる命ぞた

まそるやうりぐんやすうれんよ　わき〽あらありがたや

のはまかやあらくやうに難行いらな行君

ゐおそれもさむ　行者〽行君も[illegible]

そも是よ年ゆりゆきらうまゐせて　わき〽[illegible]ん

ひきあげ[illegible]霜ともふ　同上〽着後の[illegible]

くえん化うそそく国のおそりて来現せ給
ひゆへあらまかさの山や。なかより五色
つきわたつく光明あまねく観ん仏の菩薩に
うくちり今限いさんまするしへしたしや
乃毘沙門のさかくさかよからく来御や
へ〳 西龍女赤鉄 同上 法破掌切打扶 来かく毘沙門は光来らい哉
かく毘沙門は光未つらく行此いぶふひさ

まつりて前をもかゝるを作せし怒て菩行
不思議をそうふ不相か〳る志木まん起
押より〳兆まる川てうへあるちもいやうう
くせきうゝふ医して浅水年を持くも
あくいてまあけ行君の相前不集らすま
へも君は喜悦の友もちあし意恭の心手
不挙をよなる〳く菩武菩あ孝り切する心

千歳まるそとて釼師匠にあるへ福ひ地う
世路人はきかくもまふころにもちさもちられて
さうしな路をよふ流くなつの始めや高る
間の雲霧流るふ屋宮城の人乃めふそ
きうしらさ重き織ハ見るさせる岩橋をと
大峯かまへてを尚くも大嚴かせそて
満くと座常をを波つきく大ふ当州

帝國圖書館 6024 1917 受入 昭和36. 3.

此本者下掛り新板改正
并衣裳付秘蜜之補入
章句寫之令開板所也
正徳四甲午暦弥生吉日
新町通下長者町上ル町
谷口七左衛門
洛陽書林
伊勢や七郎兵衛

鈴木左司馬

号尚齋　重固